

人権なら

2019年7月1日

第103号

NPO なら人権情報センター

● ひと・まち・生き生き

厳しい組織現状の克服を

NPOなら人権センターが第19期総会

NPOなら人権情報センターは6月16日、三宅町あざさ苑で第19期総会を開いた＝写真。司会は明見美代子さんが務めた。古川友則・理事長があいさつ。深まる格差社会や、深刻化する「8050問題」に触れ、「一



度ルールから外れると戻れない社会の仕組み、不寛容な社会と政治の無作為」を厳しく批判した。また、「厳しい組織現状」にあるが、「組織が何をしてくれるのかではなく、個として何をしたいか。何をするのか」。ここを「紡いでいくことが相互に問われている」と訴えた＝写真。



事務所機能の充実など、諸議案を承認

議事に移り、植村照子・副理事長が第1号議案「2018年度事業報告」、第2号議案「2018年度収支報告」を提案。①インターネットによる人権情報の収集及び提供事業②人権教育のための集会・学習及びフォーラムの開催事業③高齢者及び障害者の自立と社会参加を支援する事業④基本的人権に係る生活・仕事・教育及び人権侵害に係る相談事業⑤経営改善対策指導業務/商工会連合会事業⑥部落解放運動史の編纂事業⑦その他の事業を報告。また、「昨秋以降、検討会議で事務所問題の解決と財政・賃金、雇用形態などの議論を進め、整理した」と報告した。

第3号議案「2018年度収支報告」に続き、藤田幸

司・監事が第4号議案「監査報告」。古川理事長が第4号議案「2019年度事業(案)」を提案。「事業計画(活動計画)」をはじめ、当面の課題として「事務所の老朽化に伴い、計画的に改修し、事務所機能を充実させる。ホームページの改善や、「人権なら」の紙面充実、昨年から進めている「部落解放運動史」編纂作業に力を入れる。「共闘団体の取り組みへの積極的参加」も提起した。植村副理事長が第5号議案「2019年度予算案」を提案。質疑のあと、すべての議案を承認した。



宇陀直紀さんが「学校に行きづらかった経験」

総会のあと、「学校に行きづらい経験といま」と題して宇陀直紀・フリースクール奈良「スコーレ」代表が話＝写真。宇陀さんは4月から、なら人権情報センターのスタッフとして、「かいほう塾」(中学生の学習指導など)を担当。話は、幼稚園の頃から「集団の中で何かをするのが苦手」だった。



小学校は生徒数36人の小さな学校。入学式から学校に行けなかった。行かなくなると、家族との関係や、周囲の人たちとの関係がきつかった。「フリースクール」に出遭ったが、将来への不安や、自分を責めることも。「小中の不登校児童生徒数は14万4031人。子どもの数は減少しているが、不登校は増えている」と、「不登校、引きこもりの現状」を説明。「安心できる居場所を」と、4月から始めた「奈良スコーレ」の活動と、「親の会」「学びの研究会」「おちゃかい」を紹介。主体的で自由な学び、多様な人との出会い、自分を生きる/さまざまな体験を柱に頑張る、と話した。

部落差別とアイデンティティ

内田龍史・教授が関大公開講座で提起

関西大学人権問題研究室の公開講座が5月24日、千里山キャンパスであった。内田龍史・社会学部教授が「部落差別とアイデンティティ」のテーマで話した。

「部落(民)アイデンティティ」に関する議論が本格化したのは1990年代後半。その契機になったのが同和対策事業に関わる「特別措置法」が2002年3月に期限切れとなることが確定したことにあるという。

当時の部落解放をめぐる議論は、大きく分けて、「部落民としての解放」をめざす道と、「部落民からの解放」をめざす道の2つに集約できる。前者は、「部落民」を「部落民」として差異を認め、部落外マジョリティとの<共生>を推進する立場。後者は、系譜的につながりを絶って「部落民」を存在しない立場だとする。

前者であれば、「部落民」としてのアイデンティティを保持したまま差別されない状況をめざすことになるが、後者であれば、「部落(民)アイデンティティ」やカテゴリーそのものをなくすことが重要ということになる。

アイデンティティの形成か否定か

一方では、誇りうるアイデンティティを形成・継承することがめざされ、他方では、そうしたアイデンティティを持つことそのものが否定される。ここに現代の部落問題の分かりにくさが集約される。これに応えるためには、部落解放運動における<アイデンティティの政治>という視点から検討することが重要。そこから部落解放の展望を考える、というのが内田さんの考えだ。

内田さんはアイデンティティをめぐる諸理論を取り上げる一方、<アイデンティティの政治>への批判も紹介。こうした中で、<部落(民)アイデンティティ>の位置づけを考えていく。部落の解放のためには、部落民の団結と、労働者階級との連帯が不可欠だとも、マジョリティからの否定的なまなざしによって形成される否定的アイデンティティを、肯定的なものとして捉え直す<アイデンティティ政治>の場であったとす

る。今後、部落解放運動と「部落(民)アイデンティティ」がどのような行方を辿るのか、を注視している。

上但馬でフィールドワーク

泉佐野・田尻・熊取共闘メンバーが学習交流

部落解放泉佐野・田尻・熊取共闘会議のメンバーが6月15日、三宅町上但馬を訪れ、学習とフィールドワークを行った=写真。

学習会では、古川友則・理事長が「部落産業としてグラブ製造の歴史と部落解放運動」をテーマに話。

1921年に上但馬でグローブ製造



が始まり、戦後は野球人口の拡大による需要増、対米輸出の開始(1957年165万個/1968年587万個)。人口の変化(1955年321戸人口1588人/1968年491戸2118人。県内に留まらず、九州や北海道からも流入)も。しかし、1971年「ドルショック」(1ドル360円の固定為替レートから変動相場制へ)を受け、一挙に衰退した。自身も夜間高校に通いながら、グローブ職人として働いた経験を交えて話をした。

続いて、「奈良の解放運動」と、1993年「県連分裂」をめぐり、NPOなら人権情報センターでの活動や課題を紹介。そのあと、職人たちの住宅要求闘争で実現した上但馬団地や、解放会館、金城実さんとの交流で作った「解放地蔵」などを案内して回った。

午後はフィールドワーク。「水国争闘」の経過を説明しながら、関係するスポットを巡り歩いた。下永・水平社の本部が置かれた「教願寺」ー衝突した現場の「八尾大橋」(田原本町八尾)ー国粋会が前線にした「安養寺」ー国粋会が本部を置いた「鏡作神社」(=写真)を周り、当時の厳しい闘いに思いを馳せた。



歴史振り返り、未来への一步

天王寺夜間中学創立50周年を記念し集い

「天王寺夜間中学創立50周年」を記念した50年の歩み・未来への一步が6月2日に催された。卒業生と現役生

徒による華やかで元気いっぱい



チャンゴの演奏でオープニングした=写真。

第50回同窓会総会のあと、記念の集いが体育館であった。卒業生ら200人超の人たちが参加。会場には、思い出の写真が張り出され、生徒たちが学びへの思いを

書き綴った文集「わだち」などや、高野雅夫



さんの活動を紹介するパネルが展示された。

同窓会会長の吉崎なおみさんがあいさつ。「あつて

編集後記 ☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

虐待やDVが激増している。児童相談所の児童虐待相談対応件数(2017年度速報値)は133,778件だ。件数は毎年、過去最多を更新。配偶者暴力相談支援センターへの相談も10万件(同年度)を越える。高齢者や障害者に対する虐待も多い。背景には、経済的困窮や社会的孤立など、さまざま要因がある。問題を個人や家庭の所為だけにできない。痛ましい事件報道が繰り返されるが、対応や対策が心許ない。「予算がない」「人手がない」と言い訳する。人を殺す軍事に巨費を投入するが、命を救うことに掛けない政府。他国に比べ、関連予算が圧倒的に少ない。

はならない夜間中学、されどなくてはならない夜間中学」との出会いを述べ、50周年を迎えた熱い思いを語った。スライド「映像で見る天王寺夜間中学50年」が映し出された



=写真。運動会の様子や13か国以上の生徒が集う学校での活動や昼間の中学生との交流、就学援助や補食給食の打ち切りへの抗議行動の様子など、思い出のある映像が流れた。

現役・同窓生が「夜間中学と私」を語り合う

大阪に拠点を移し活動を続ける高野雅夫さんが天王寺夜中から始まった関西夜中の歴史に触れ、50周年をオール関西で実現できなかったのは残念と述べ、次の一步へ熱いエールを送った。金城実さんは沖縄・辺野古をめぐる闘いと憤りを語り、

生徒、同窓会役員と5



月28~30日に行った「夜中生の像」修復作業(写真)を紹介。熱い思いと力強さに感銘したと話した。

「夜間中学と私」を語り合う会では、パネラー6人が発言。42期生の大西さんは「障害を理由に就学免除とされ、42歳で夜間中学と出会った」。1期生の豊島さん、50期生の金喜子(キム・ヒジャ)さん、42期生の李光燮(リカンソブ)さんも発言した。会場からも発言があった。最後に、全員で、さまざまな思いを胸に、「夜中の歌」(オンヘヤ〜)を大合唱。集いを終えた。

ニュースレター「人権なら」

発行:NPO法人なら人権情報センター
〒636-0223

奈良県磯城郡田原本町鍵301-1

TEL:0744-33-8585/FAX:0744-32-8833

E-mail:info@nponara.or.jp

http://www.nponara.or.jp/